

道 特 P 連 会 報 第 76 号

令和 8 年 (2026 年) 3 月 2 日発行
北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会
(事務局) 〒066-0045 千歳市真々地 2 丁目 3 番 1 号
北海道千歳高等支援学校 TEL : 0123-23-6681 / FAX : 0123-23-6682
(発行責任者)
北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会事務局長 岩 佐 延 寿



変化を恐れず

北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会 会長 田 中 卓
(北海道千歳高等支援学校 PTA 会長)

会員の皆様におかれましては、日頃より本協議会の活動に深い御理解と御協力を賜り、心より御礼申し上げます。さて、私は昨年度の北海道真駒内養護学校 PTA 会長北條俊介様から引き継ぎ、北海道千歳高等支援学校 PTA 会長を務めます田中卓と申します。本会の会長として少しでも皆様の力になれるよう努めてまいりますのでよろしく申し上げます。

本会の目的であります「障害のある児童生徒の幸福のため」を念頭に、家庭、学校、関係機関や地域が連携し、社会自立に向けた取組を進めてまいりました。私自身も、将来が予測困難な今だからこそ、この会の役割が重要だと感じております。

この一年、私は本会を代表として、「北海道発達支援推進協議会・広域特別支援連携協議会」等の会議に参加させていただき、障がいのある児童生徒に対する教育的支援の充実や支援体制の整備の推進を目的とした会議に PTA の代表として参加したことが、自分にとってたくさんの刺激といろいろな方との繋がりを作る機会をいただきました。

また、この会を通して、学校だけでは担いきれない部分を家庭や地域と連携し、多くの方々の思いを一つにして、子どもを中心に据えて支え合うことが、地

域の活力の再生にもつながると考えております。

本年度の北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会第 25 回合同大会 (オホーツク大会) では、前回大会 (石狩西部・後志大会) の開催方法を参考とし、北見支援学校をメイン会場に各学校をオンラインでつなぐ形で実施しました。今回の大会においては、全道より約 400 名の方に参加していただき、大変有意義な大会となりました。

合同大会は、平成 13 年度から特別支援教育振興大会と特別支援教育関係 PTA 研究大会が合同で行う大会となりました。昨年度から将来を見据えた大会の在り方や組織の見直しについて協議を進めてまいりましたが、令和 8 年度からは、「北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会『研究大会』」と名称を改め実施します。これまでの長い歴史の中で培われてきた思いや役割を継承するとともに、必要な変化を恐れず、新たな取り組みも考えながらより良い協議会の運営につなげていきます。

結びに、本協議会並びに各特別支援学校 PTA の一層の発展を祈念し、御挨拶とさせていただきます。

合同大会 障がい種別分科会報告

視覚障がい分科会

【助言者】

迎 晶子（道立特別支援教育センター教育課
主査 視覚障がい教育室長）

【司会者】

坪川 寛司（札幌視覚支援学校 副校長）

【運営者】

林 秀之（紋別養護学校ひまわり学園分校 教諭）

【記録者】

長嶋 翔太（紋別養護学校ひまわり学園分校 教諭）

■提言

【提言①】

「幼児期から成人までの発達支援を推進するために」
函館盲学校 PTA 会長 由利 里美
（代読） 函館盲学校教頭 和田 悟
函館盲学校は、全校児童生徒10名の小規模校で、今年度創立130周年を迎える歴史ある学校である。視覚障がいだけでなく、その他の障がいを併せ有する子どもたちも在籍している。

インターネットの普及により情報は得やすくなってきたが、子育てや高等部進学、卒業後の進路に関する悩みには、周囲の人々や関係機関とつながり、正確な情報を得ることが重要であると感じている。子どもの将来の自立に向けて、必要な力を段階的に身につけられるよう支援すること、そして保護者一人で抱え込まず、地域や学校と協力して子どもの幸福を支えていくことの大切さを改めて実感している。

【提言②】

「札幌視覚支援学校 PTA 活動について～PTA の活動内容と課題～」

札幌視覚支援学校教諭 越智 美月
札幌視覚支援学校は、幼児児童生徒数69名、保護者67家庭が在籍している。道内で高等部を有する視覚支援学校は札幌視覚支援学校のみであり、保護者の居住地が全道に及ぶ。

PTA 研修会の具体例としては、点字の仕組みや歴史などを学ぶ「点字研修会の実施」、フロアバレーボールやブラインドサッカーなどの「視覚障がいスポーツ研修会の開催」、「学校外での交流活動の実施」である。課題としては、保護者の居住地が広範囲に及ぶため、札幌市外の会員も参加しやすいようオンライン活用を検討する必要がある。また、盲学校に通う子

も地域で学ぶ子ども、分け隔てなく支援につながる環境づくりが必要だと考えている。

■協議

【協議の柱①】

「ライフキャリアの視点からの家庭・学校・関係機関との連携について」

- 帯広では、地域の防災マスター・町内会・市の危機管理課・ロータリークラブと連携して防災学校を行った。ダンボールベッドの組立、非常用電源体験、防災トイレ組立など体験を通して、家庭・学校・地域が連携して実践的な防災教育を実施した。
- 札幌では、北海道マラソンの事務局やよつ葉乳業と連携してボランティアマッサージ活動を行った。また、食育の一環として、北海道漁連の協力による鮭やほたての触察体験、スープカレー店との連携による食材を題材とした学習を行っている。
- 旭川では、事業所見学や当事者の講演など、進路選択につながる PTA 活動を重視している。

【協議の柱②】

「道内盲学校・視覚支援学校における PTA 活動の活性化に向けた取組について」

- 保護者のニーズに合わせ、全盲より弱視やダウン症を含む多様な子どもの実態に応じた研修内容を検討することが必要である。
- 保護者が実際の経験から学ぶ機会の重要である。
- 同窓生や当事者との連携は、PTA 活動の活性化につながる。
- PTA 活動の地理的な困難を補うため ICT を活用し、保護者同士が気軽に交流できる場をつくることや、卒業後も相談できるネットワークづくりが求められている。
- PTA 役員間では LINE グループを活用して情報共有を行っている例がある。

■助言

迎 晶子 氏より

- 函館盲学校において、「信頼できる関係性の構築と連携の強化」が図られており、「6W2H（何を、誰に、いつ、どこで、誰が、どのように、いくら）」の視点で活動の計画を整理し、情報共有することにより、PTA 活動が一層充実すると考える。
- 「早期からのライフキャリア教育の推進」として、子どもたちの生活の質を高めるための支援を充実させることが求められている。

- 札幌視覚支援学校の提言において、「見える人と見えない人が互いに理解し合う機会を設けること」の重要性が示されている。
- オンラインを活用した「どさんこ育児交流会」の取組は、地理的な制約を越えて交流を可能にする意義深い活動である。
- PTA活動を通じて、子どもたちや保護者、地域が互いに声を掛け合う、安心して社会参加できる環境づくりを目指し、学校と地域がパートナーとして協働できるよう、課題や目標に対するビジョンを共有し、活動を維持することを期待する。

聴覚障がい分科会

【助言者】

島田 慎平（道立特別支援教育センター教育課
研究員 聴覚・言語障がい教育室長）

【司会者】

林 秀智（帯広聾学校 教頭）

【運営者】

木下 直之
（紋別養護学校ひまわり学園分校 教諭）

【記録者】

黒川 紀子
（紋別養護学校ひまわり学園分校 教諭）

■提言

「進路選択で大切なこと」

～障がいの特性の理解と家庭での関わり～

高等聾学校 PTA 会長 今野 聡美

聴覚障がいのある子ども二人を育てている。一人目は本校専攻科を卒業し、病院の事務職として働いており、就職して3年目である。二人目は進学を目指して学んでいる。寄宿舎生活をしているため、中学部までのように子どもとの時間をとることが難しくなっている。その中でも進路については親子で話し合う必要がある。卒業までに進学か就職かを決め、就職先を選ぶことは子どもにも保護者にも大きな課題である。高等聾学校では年3回進路希望調査票を提出し、親子で話し合っけて記入することになっている。その際は親の考えを押し付けず、子どもの選択を尊重することが大切だと考えている。就職活動では聴覚障がい者への企業側の理解不足を感じる場面もあった。社会で必要なのは資格と日本語力であり、子ども自身が障がいを理解し、必要な配慮を自分の言葉で伝えられる力が重要である。各学校の先生には、進路に関する情報を積極的に収集し、生徒が卒業した後も気軽に相談できるような関係を築いてほしい。

■協議

【協議の柱】

「子供の自立や社会参加を目指した家庭・学校・関係機関との取組について」

- 聴覚障がい分科会では、幼児期から成人期までの発達支援について保護者間で意見を交わした。各学校のPTA代表者が、子どもの発達段階に応じた支援や悩み、家庭での取り組みを共有した。
- 課題として、集団経験の少なさや高校選択から就職を見据えた計画的支援の必要性が挙げられた。中学生の子を育てる保護者からは、聞こえる友達が欲しいが緊張してしまい、障がいを伝える難しさがあるという声があった。また、公共交通機関を一人で使えるようになり行動範囲は広がったが、困りごとを伝える力の育成が課題とされるとの意見もあった。
- 家庭では家事や料理を通じて自立を促しているが、高校からは寄宿舎生活への不安もあるという保護者の意見。職場体験を通じて働くことの大変さを実感し、お金を稼ぐ価値を理解する機会となったという報告もあった。
- 小学3年生の子を育てる保護者からは、子どもが地域の友達との関わりと聾学校での学びの両方を望んでいる。どこまでをサポートし、どこまで後押しするべきか支援の見極めが難しいとの話があった。幼稚部に入って2か月で自己肯定感が高まり、保護者同士の仲間意識が心の支えになっているという報告もあった。本人の意思を尊重して高等聾学校への進学を決断した家庭もあった。発達段階に応じた経験の場の提供、家庭が安心して挑戦できる場であること、意思決定の尊重と情報提供の重要性、学校と家庭の連携の必要性が確認された。

■助言

島田 慎平氏 より

- 各学校の提言を通して、聾学校の役割と今後のPTA活動への期待を実感した。全国の聾学校高等部卒業生の進路状況において、大学進学者が増加傾向にある中、就職者も一定数いる。企業から求められる、社会的常識（あいさつ・礼儀・責任感）、基礎学力・言語能力、障がい認識（必要な配慮を自己開示する力）を身に付け、高められるよう、学校と家庭が一体となって育むことを期待する。
- 進路指導は高等部だけでなく、幼稚部からの一貫した支援や見通しの共有が大切である。早期から進路への意識付けを行い、子どもが主体的に将来を考えられるよう支援することが重要である。
- 自立して生きるためには、学力や技術だけでなく、豊かな人間性が必要である。子どもが経験を

積むタイミングの見極めは難しい部分もあるが、家庭・学校・関係機関が連携し、子どもの成長に応じた支援を行うことが求められる。具体的には、①自律した生活を送る力、②あいさつやコミュニケーションの力、③協調性をもち、チームの一員として行動できる力が重要であり、これらの力を育むため、全ての教職員が関わる姿勢をもち、学校全体で連携し、子どものよりよい人間性を育ててほしい。

肢体不自由・病弱分科会

【助言者】

大西 修 (道立特別支援教育センター教育課主任研究員 肢体不自由・病弱教育室長)

【司会者】

吉岡 奈穂子 (拓北養護学校教頭)

【運営者】

小西 聖彦 (網走養護学校教頭)

【記録者】

串田 和哉 (網走養護学校教諭)

■提言

「誰もが参加しやすい子どもたちの笑顔につながる PTA 活動の実現に向けて

真駒内養護学校 PTA 会長 朝倉 涉

真駒内養護学校における PTA 活動の現状と課題を踏まえ、参加しやすく持続可能な組織づくりの必要性を提言する。本校の PTA 活動は「環境整備」「研修」「広報・防災」の三本柱で構成されており、花壇づくりや避難訓練、校舎清掃など、児童生徒の安全と豊かな学校生活を支える実践が進められている。事務局会議には Zoom を導入し、時間や距離の制約を受けにくい体制を整備。さらに、保護者間や教職員との情報共有を円滑にするため、Facebook や Instagram 等の SNS を活用している。

近年、共働き家庭の増加や生活様式の多様化により、従来型の PTA 活動では参加が難しい保護者が増えている。本校では、こうした社会的変化に応える形で柔軟な運営を模索し、保護者一人ひとりが「自ら関わりたい」と思える活動づくりを重視している。「PTA 活動の目的は子どもたちの笑顔につなげることにあり」と考え、今後も保護者と教職員が協働しながら、学校・地域・家庭を結ぶ温かなつながりを育てていきたい。

■協議

【協議の柱①】

「参加しやすい PTA 活動の在り方」

- 各校からの報告では、保護者の多様なライフス

スタイルに応じた参加促進策が共有された。岩見沢高等養護学校では、役員会を帰省日に合わせて開催し、LINE による情報共有を実施。手稲養護学校では入院生が多い実情を踏まえ、文化祭での子ども縁日や福祉事業所見学会など、保護者が無理なく関われる活動を展開している。拓北養護学校は「事務局だより」発行や校長との座談会を通じて信頼関係を深め、山の手支援学校では進路研修会や懇親会「茶話会」によって、保護者同士のつながりを強化している。

- 豊成支援学校では、家庭教育学級を軸にスクールカウンセラーを招いた研修を実施し、北翔支援学校ではおむつ研修・救急蘇生法講習など、日常的な支援力向上を目的とした学び合いを継続。函館養護学校ではランチ会や給食試食会など、気軽に参加できる場を設け、網走養護学校では運動会での焼き鳥販売や学校祭でのカレー提供など、保護者が楽しみながら関われる仕組みを整えている。これらの実践は、オンラインツールや地域資源の活用によって“参加の壁”を低くする有効な例として共有された。

【協議の柱②】

「持続可能な組織運営と次世代への継承」

- 多くの学校で共通して挙げられた課題は、役員の成り手不足と活動目的の不明確さである。特に共働き家庭や医療的ケア児を抱える家庭では、参加への心理的・時間的負担が大きいことが指摘された。その中で、真駒内養護学校が検討する SNS 発信やオンライン参加の仕組みは、情報格差を縮める試みとして注目された。
- 討議では、「活動目的を改めて共有することが、継続性の鍵である」との意見が多く出された。保護者同士が“つながること自体”を価値とし、互いの知恵や経験を交換しながら、活動を“支援の輪”として再定義する重要性が確認された。さらに、芸術体験やアウトドア活動など、子どもの経験を広げる機会づくりも今後の方向性として提案された。

■助言

大西 修 氏より

- 平成から令和にかけて進行する社会の変化(家族構成、働き方、価値観の多様化)を踏まえ、今や多様性は前提であり、自分らしい関わり方を尊重する時代である。その上で、PTA 活動は「誰もが参加しやすく」「子どもたちの笑顔につながる」ものであるべきだと考える。オンライン参加や SNS 等による発信の導入はその第一歩であり、活動の“目的の再確認と共有”が持続の鍵になる。

また、保護者が自らの生活や価値観に即して参加できるよう、活動の柔軟化を進めることが、結果として学校と家庭、地域との信頼を深め、子どもたちの幸福感を高める基盤となる。つながりを活動の核に据えることこそが、子どもたちの笑顔をより輝かせる原動力であることから、各校の実践が今後の各校の PTA 活動の発展に生かされることを期待する。

知的障がい分科会(義務併置校)

【助言者】

日小田 泰昭 (道立特別支援教育センター教育課
主査 自閉症・情緒障がい教育室長)

【司会者】

松岡 志穂 (鷹栖養護学校 教頭)

【運営者】

音羽 孝文 (紋別養護学校 教頭)

【記録】

米森 健 (紋別養護学校 教諭)

■提言

【提言①】

「平取養護学校の PTA 活動について
～続ける大切さと変わる大切さ～」

平取養護学校 PTA 会長 橋場 香澄

本校は小学部 9 名、中学部 16 名、高等部 47 名の児童生徒が在籍している。校区が広く、約 8 割の児童生徒が寄宿舎生活を送っている。寄宿舎生が多く、保護者が学校に来る機会が少ないため、始業式などの来校時に合わせて PTA 活動を計画している。保護者同士の交流を目的とした「茶話会」を年に 5 回程度実施している。親子レクは、日高地区で乗馬体験や胆振地区でスケート体験を実施した。また昨年度から、ペテカリの園分校や苫小牧支援学校と合同で親子レクを実施している。

コロナで中断した PTA 活動の再開は歓迎すべきことだが、今後 PTA が子どもたちの良き理解者、支援者としてよりよくあり続けるためには、新たな活動や仕組みを模索し、子どもたちと PTA のウェルビーイングを保てるような活動を無理のない形でつくっていくことが必要である。

【提言②】

「児童生徒が毎日笑顔で生き生きと楽しく過ごす
ために～地学協働の視点を踏まえて～」

室蘭養護学校 主幹教諭 丸山 直美

本校の児童生徒数は 146 名で、そのうち寄宿舎生が 6 名である。また、医療的ケアを必要とする児童生徒が 8 名在籍している。放課後等デイサービスの充実に伴い働く保護者が増え、PTA 活動への参加が難しくなっている。役員を引き受ける保護者が少なく、また業務の効率化を図るためにも、今年度から専門部を 3 つから 2 つに集約した。

夏休み中に開催した親子レクでは、よさこいチームを招致した。同窓会の店を設け、卒業生が利用している事業所が作品展示や菓子の販売を行った。また、「コスモスロード」という 20 数年以上続く活動では、町内会や隣接する高校、PTA、児童生徒が種まきや草取りに関わっている。

PTA の組織を変えたばかりだが、児童生徒・保護者・教職員も笑顔で生き生きと過ごせるような活動を探して発展させていきたい。

■協議

【協議の柱①】

「子どもたちが、笑顔で生き生きと学校生活を送るために、学校、保護者、地域が手を取り合い、「楽しいつながり」や「新しい活動」を作っていくための、具体的なアイデアについて」

- PTA 茶話会を年に 4 回実施し、医療や事業所に関する話、卒業生の保護者の話、栄養教諭の話などそれぞれテーマを決めて行っている。PTA 懇親会、親子レク、給食試食会なども行っている。
- コロナ前に夏祭りとして実施していたものを「秋祭り」として復活。よさこいチームやマジックショー、教員によるバンド演奏なども行っている。
- 茶話会は、男子の保護者、女子の保護者のグループに分かれて、情報共有を行った。親子レクは、クリスマスシーズンに実施している。
- 夏の交流会を再開し、町の施設を利用して親子でポッチャを楽しんだ。春と秋には、窓拭きやグラウンド整備を行い、その後に茶話会を行っている。障がい年金についての学習会は希望者が多く、2 回に分けて実施した。
- 「YDD (やりたいことをできる人ができる範囲で)」を実施している。Google フォームに、会員のやりたいことを気軽に投稿し、それをもとに企画を立案している。卒業生の保護者から進路選択について学ぶ会を開催した。
- 「親父の会」が活発に活動し、グラウンド整備や親子バーベキューを開催している。また、卒業生の保護者が主体となったバザーや縁日を 6 年ぶりに再開した。制服譲渡会を今年から実施した。

■助言

日小田 泰昭 氏より

- PTA 活動を通して、子どもと保護者、教職員が
ながら、絆を深める目的を明確化し、保護者が来校
する機会を捉え、計画的に取組が進められていた
ことは、持続可能な PTA 活動の工夫と考える。
- 目指す子どもの姿を教職員と保護者が共有し、
地域資源の活用と学校の授業との連動を図り、地
域の環境整備を行うなど、PTA 活動が学校における
教育活動の中で一体となって進められ、好循環を
生み出している。
- 本分科会も PTA 活動におけるつながりの一つで
あり、協議を通じて得られた情報や思い浮かべた
アイデアが、今後の PTA 活動の充実につなげられ
ることを期待する。

知的障がい分科会 (高等部単置校)

【助言者】

荒井 美聡 (道立特別支援教育センター教育課
研究員 発達障がい教育室長)

【司会者】

奈良 吉高 (白樺高等養護学校 教頭)

【運営者】

村田 仁美 (紋別養護学校 教諭)

【記録】

加藤 利幸 (紋別養護学校 教諭)

■提言

【提言①】

「地域と共に歩む学校の PTA 活動

～あい circle への協力」

札幌あいの里高等支援学校 PTA 会長 覺間 由美
開校 10 年目で、生産技術科、環境・流通サポート
科、被服デザイン科、食品デザイン科、福祉サービ
ス科、普通科を設置する。

「福祉の街づくり」として、地域と連携した活動
を進めている。「あい circle」という地域共同、地域
貢献、地域創生に向けた取組で、地域の様々な団体や
大学と連携し、販売活動や活動紹介、交流レクリエ
ーションを行っている。

今年も 7 月に北海道教育大学札幌校を会場とし、
第 1 回目を実施した。PTA も「あい circle」に協力
し、生徒の達成感や成就感を養い、自己肯定感を高め
る活動を支援している。

地域のプラットフォームとしての「あい circle」
が、コミュニティの発展、活性化、共生社会の実現に
つながる取組となるよう協力している。

【提言②】

「ライフキャリアの視点から、幼児期から成人まで
の発達支援を推進していくための本校の役割」

今金高等養護学校 教諭 西村 信隆

開校 29 年目で、窯業科、農業科、家庭総合科の三
つの職業学科を設置し、多くの生徒が寄宿舎を利用
する。

作業学習では、卒業後の「職業自立」と「社会自立」
を育てることを目指している。また、寄宿舎での活動
では、「生活を組み立てる」という考え方で、食事時
間や場所を生徒が選択し、自ら考えて判断する力を
育てることを目指している。

「ライフキャリア」の基本的な考え方は、現場実
習、実習に向けた学習、生活単元学習の強み、道徳、
寄宿舎生活での有用性など、各教育活動がなが
っていることが重要となる。日々の学習活動の積み重
ねが、ライフキャリアの充実につながり、合わせて家
庭との連携が大切である。

また、「ライフキャリア」の視点から、特別に何か
を行うことよりも、日々の学習活動の質を向上し、卒
業後の生活を充実するための力を育てることが学校
の役割である。

■協議

【協議の柱①】

「子どもたちが地域の中で自分らしく成長し、将
来の「自立」や「自己表現」につながる経験を積むた
めに、学校、保護者、地域は、どのような役割を担い、
どのように連携していくか」

○ 白樺高等養護学校では、地域への貢献活動とし
て、町内会のお祭りで太鼓部の演奏や地域のバス
停清掃、製品販売会などを行い、地域との良好な関
係を築いている。

○ 中札内高等養護学校では、クラウドファンディ
ングを活用した「花と緑の村づくり」に取り組み、
保育園の子どもたちと公園の植栽活動を行うなど、
地域と連携している。

○ 紋別高等養護学校では、生徒の将来の自立や自
己実現のために、「地域の中に生徒の味方を増や
す」ことが重要で、PTA の参加型授業参観から始ま
り、地域のふれあい広場での活動へと発展させて
いる。

○ 札幌高等養護学校では、教師の私物端末での撮
影が禁止されたことによる課題と、PTA と連携して
公用カメラの準備を要望する取組をしている。

○ 釧路鶴野支援学校では、自立活動の時間を定期
的に設けている。PTA の活動として給食試食会を実
施したが、保護者同士の交流が少ないことに課題
がある。

○ 市立札幌豊明高等支援学校では、百合が原公園

内の民営化施設と包括連携協定を結び、五つの学科がコラボレーションをして学びを進めている。

- 札幌あいの里高等支援学校では、地域の関わりで大切なこととして、①相手が価値を感じる活動であること、②相手の経験や体験に働きかけて活動の共有と共感を得ること、③相手の日常になる継続的な活動であるという点である。

■助言

荒井 美聡 氏より

- PTA 活動において、ウェルビーイングの向上を目指す視点とともに、生徒が「何のために」活動しているかなどの目的についての共通理解を図り、一人一人が PTA 活動に主体的に関わることが大切である。

- 知的障がいのある生徒にとって、PTA 活動が、その後のつながる学びを得る機会となるよう、「体験・経験から学びへ」をキーワードに活動の充実を図るとともに、生徒の願いを中心に据えて、保護者、教職員、地域通して学びにつなげることが大切である。また、子どもの願いを中心に置き、学校、PTA、地域、関係機関が同じ目線で支えていくことが大切である。

- 生徒が、自分の人生を歩む主役として卒業後に羽ばたけるよう、今後も PTA の会員や組織が連携し、取組が進められることを期待する。

【令和 8 年度総会のお知らせ】

令和 8 年度
北海道特別支援教育関係 P T A 連絡協議会
総会・研究協議会

日 時：令和 8 年 5 月 9 日（土）10:00～

開催形式：オンライン形式

場 所：各校にて

事務局校（千歳高等支援学校）より配信

※各障がい種の P T A 総会は、時期や方法について障がい種ごとに検討し設定します。

【第 1 回研究大会のお知らせ】

北海道特別支援教育関係 P T A 連絡協議会

第 1 回 研究大会（胆振・日高大会）

日 付：令和 8 年 10 月 3 日（土）

開催形式：オンライン形式

場 所：メイン会場 平取養護学校

サテライト会場 各特別支援学校

大会主管校：平取養護学校

※メイン会場から各校へ配信する予定です。

【編集後記】

今号も、第 60 回北海道特別支援教育振興大会・第 50 回特別支援教育関係 PTA 研究大会・第 25 回合同大会（オホーツク大会）分科会の司会者、記録者の皆様方の原稿作成の御協力により、無事予定どおり完成、発行の運びとなりました。この場をお借りして、関係の皆様へ感謝申し上げます。

さて第 25 回合同大会をもって、大会名の名称を改め、令和 8 年度は「北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会・第 1 回研究大会（胆振・日高大会）」として開催することになります。令和 5 年より事務局及び役員を中心に整理をし、今まで行ってきました振興大会としての意義を再確認した上で、大会の変更を決定しました。今年度の総会においても、会員の皆様に御理解をいただきました。これまで取り組んできたことを継承しながら、時代に合った研究大会をつくりあげていきたいと考えております。

大会主題であります「共に学び生きる共生社会の形成とウェルビーイングの実現に向けて」を家庭や学校、地域が連携し、子どもたちの社会自立への実現に向けた取組や協議の場となるように、これからも皆様からの御理解と御協力をいただきながら、特別支援教育関係 PTA 連絡協議会の一層の発展と推進に取り組んでまいります。